

イギリス・アメリカ相互交流に関する ディスコース研究

研究代表者 高橋正平

本プロジェクトでは2005年度、以下の成果を「人文科学研究 第118輯」（平成18年3月）に発表した。

1. 高橋 正平「ヴァージニアコロニアリズムのレトリック」
2. 高橋 康浩「政教分離の意味するもの」
3. 葦沢 梓「「ピューリタンの共同体」としての17世紀ニュー・イングランド社会」

高橋（正）は17世紀初頭のイギリスによるヴァージニア植民の実態を解明した。経済的色彩の強いヴァージニア植民を説教家がいかにして宗教的使命を帯びた植民としているかを3人の説教家を分析することによって明らかにした。高橋（康）の論文はマサチューセッツの植民を扱い、政教一致を提唱しながらなかには神権政治に批判的なピューリタンもいて、彼らは教会と国会はバランスを持って維持されるべきだと主張している。これが現在のアメリカに色濃く反映されていることを高橋（康）は論じた。葦沢はニュー・イングランドのピューリタンを論じ、特に Cotton Mather の大著 *Magnalia Christi Americana* を取りあげ、いかにして植民当初の敬虔なピューリタン社会を復興させるかに Mather が取り組んでいたかを論じている。今回の成果はアメリカ植民初期のイギリスとアメリカの関係に関するものである。次の研究はイギリスとアメリカの関係が個々の文学作品にどのように表れているかであり、現在鋭意準備中である。